



TITLE:

京大広報 No. 732

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 732. 京大広報 2017, 732: 4899-4921

ISSUE DATE:

2017-11-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233044>

RIGHT:

京大 広報

Kyoto University



※ P4913 参照



※ P4909 参照



※ P4912 参照

2017.11
No. 732

目次

〔大学の動き〕

- プロボストが指名される 4900
- 理事補が発令される 4900
- 経営協議会委員（学外委員）が発令される 4900
- 部局長の交替等 4901
- 第 68 回京都大学未来フォーラムを開催 4901
- 第 12 回京都大学東京フォーラムを開催 4902
- フランス国立科学研究センター（CNRS）との学術
交流協定更新の調印式を挙行 4904
- 博士学位授与式を挙行 4905
- 全学教育シンポジウム「社会とつながる京都大学の
教育」を開催 4906
- 日本学術会議近畿地区会議 学術講演会を開催 4907

〔部局の動き〕

- 医薬系総合研究棟「イノベーションハブ京都」開所
記念式典を開催 4909
- 瀬戸内海研究会議 京都大学大学院地球環境学堂主催
「平成 29 年度 瀬戸内海研究フォーラム in 京都 ～川と
海のつながりが育む豊かな文化と生態系～」を開催 4910
- 林 芳正 文部科学大臣が防災研究所附属火山活動
研究センター（桜島火山観測所）を視察 4912

- 平成 29 年度京都大学森林科学公開講座「感じる
樹木」を開催 4913

〔寸言〕

- 自立 吉村 章太郎 4915

〔随想〕

- 企業に触れて思うこと 4916
名誉教授 小森 悟

〔洛書〕

- 斜面崩壊雑感 千木良 雅弘 4917

〔話題〕

- 平成 29 年度総長杯ディスクドッジ大会を開催 4918
- 本学学生が第 29 回ユニバーシアード競技大会
（2017/ 台北）で金メダルを獲得 4918
- 高等教育研究開発推進センター 大学生研究
フォーラム 2017 を開催 4919

〔訃報〕

- 沢田 敏男 元総長・名誉教授 4921



京都大学



大学の
動き

プロボストが指名される

10月1日付けでプロボストが指名されました。任期は平成30年9月30日まで。



プロボスト
湊 長博

[目次に戻る ↗](#)

理事補が発令される

【任期：平成29年11月1日～平成30年9月30日】

戦略調整担当 出口 康夫 文学系（大学院文学研究科）教授（新任）

戦略調整担当 萩原 正敏 基礎・社会医学系（大学院医学研究科）（新任）

[目次に戻る ↗](#)

経営協議会委員（学外委員）が発令される

10月25日付けで経営協議会学外委員が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



株式会社IHI 常務執行役員
水本 伸子

[目次に戻る ↗](#)

大学
の
動き

部局長の交替等

(新任)

野生動物研究センター長

村山美穂 野生動物研究センター教授（人類進化科学）が、幸島司郎 野生動物研究センター長の後任として、10月16日付けで選出されました。任期は平成31年10月15日まで。



(再任)

医学研究科長・医学部長

上本伸二 医学研究科教授（外科学分野）が、10月1日付けで医学研究科長・医学部長に再任されました。任期は平成30年9月30日まで。

[目次に戻る ↗](#)

第 68 回京都大学未来フォーラムを開催

今回の京都大学未来フォーラムは、工学部卒業生の千本倅生 株式会社レノバ代表取締役会長を講師に迎え、10月3日（火）、百周年時計台記念館において開催しました。

「本物の起業家とは ～ Get it done! ～」と題した講演の中で千本代表取締役会長は、約20年在職していた日本電信電話公社が民営化されるのを契機に、稲盛和夫 京セラ株式会社名誉会長とともに現在のKDDIを立ち上げたこと、その根底に、世界では大企業に勤めることよりも自分で起業すること、アントレ



講演する千本代表取締役会長

プレナーであることが評価されるというアメリカの大学院時代に触れた知見があったことを話しました。そして講演の最後には、学生へのメッセージとして、ベンチャーを作ろう、自分たちが世界を変えようという大きな野心をもって、世界の流れをいつも見て、周到に準備



質疑応答の様子

して、必ずアクションを起こすこと、私利私欲を捨て社会そのものを変革する事業を続けること、そうすれば、世の中の多くの人たちの支持と応援を得て素晴らしい結果がもたらされるだろうと、熱を込めて語りかけました。

参加者からは、「とても有意義で、学生ファーストなのがとてもうれしかった」、「大

大学の
動き

企業に就職することが最も良い人生の進み方であると思っていたので、起業が良いということに驚いたし、他の国では認められている考え方であるということが少し自信になった」、
「60代にしてベンチャーを立ち上げようとしているので、大変勉強になり、また勇気をいただきました」などの感想が寄せられました。

(総務部(渉外課))

[目次に戻る](#)

第12回京都大学東京フォーラムを開催

「面白い(おもしろい)を探究するーいのちをさぐるー」をテーマに、第12回京都大学東京フォーラムを10月13日(金)、パレスホテル東京で開催しました。出席者は約310名で、学外からは本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等に多く参加いただき、学内からは山極壽一 総長をはじめ、理事・副学長、監事、部局長等が出席しました。また、今年度からの取り組みとして、「総長賞」および「たちばな賞」の平成28年度受賞者である学生や、「京都大学体験型海外渡航支援制度～鼎会プログラム「おもしろチャレンジ」～」の平成28年度採択者である学生も参加し、参加者との交流を深めました。

本フォーラムでは、山極総長による挨拶の後、斎藤通紀 医学研究科教授が「精子と卵子を創る科学ー生命継承機構の探究ー」と題して、また藤田みさお iPS細胞研究所部門長・特定准教授が「人工生殖細胞作製の倫理ー社会でさぐるいのちの未来ー」と題して講演を行いました。続いて山極総長と稲葉カヨ 理事・副学長、斎藤教授、藤田特定准教授の4名により、生殖細胞研究および生命倫理研究についてのパネルディスカッションが行われました。



挨拶する山極総長



講演する斎藤教授



講演する藤田特定准教授



講演会場の様子

大学の
動き



【写真左】パネルディスカッションの様子
【写真右】パネルディスカッションを進行する稲葉理事・副学長

講演会終了後に実施した懇親会では、来賓の戸谷一夫 文部科学省事務次官，山西健一郎 三菱電機株式会社取締役会長からそれぞれ挨拶がありました。

また、今回の東京フォーラムの開催に先行して、同日に経済界のトップで活躍する卒業生が結束して京都大学総長を応援しようという集まりである「京都大学鼎会」の第6回総会が約50名の出席者を得て開催され、今後の本学の発展に向けての意見交換などが行われました。

本フォーラムは、首都圏における本学の情報発信という目的に留まらず、出席いただいた各



挨拶する戸谷次官



挨拶する山西会長



参加学生たち



懇親会会場の様子

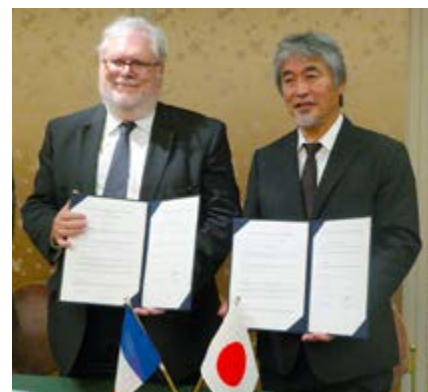
界で活躍されている本学関係者の結束を図るという効果を期待して実施しています。今後もこのような機会を継続的に提供し、本学のプレゼンス向上に努めていきたいと考えています。

(総務部 (渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

フランス国立科学研究センター (CNRS) との学術交流協定更新の調印式を挙行政

10月1日(日)、山極壽一 総長とアラン・フックス (Alain Fuchs) フランス国立科学研究センター (CNRS) 総裁が学術交流協定更新の覚書に署名しました。今回の調印式は、国立京都国際会館で開催された「第14回STSフォーラム (科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム)」に出席するためのフックス総裁来日に合わせて行われたものです。調印式には山極総長、稲葉カヨ 理事・副学長、阿曾沼慎司 理事のほか、産官学連携本部から教員も参加しました。



アラン・フックス総裁と山極総長

CNRSとは2013年に協定を締結し、特に科学・物理分野において研究交流を行ってきました。その例として、「Chiral nanostructures for photonic applications」, 「Photo-active nanomaterials with cooperative and synergetic responses」, 「Impacting materials with light and electric fields and watching real time dynamics」の3つのテーマにおける日仏複数の大学、研究機関による国際共同研究所の開設が挙げられます。

また、2015年から2年間、CNRSの研究者が京都大学へ派遣され、開発された新技術を企業へ移転するためのクロスプロモーションを推進してきました。

今回の協定更新によって、このイノベーションと技術移転に関するパートナーシップの継続も可能になりました。今後両機関で一層の共同研究を進めるとともに、企業・CNRS・京都大学3者間の研究協力の発展を目指していきます。



調印式後の集合写真

(企画・情報部 (国際交流課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

博士学位授与式を挙

9月25日(月)、百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、山極壽一 総長、理事・副学長をはじめ、各研究科長、学館長、学舎長、教育部長出席のもと、博士学位授与式が挙行されました。

今回の博士学位授与式の対象は、平成29年5月23日付け授与の課程博士52名、論文博士8名の計60名、同7月24日付け授与の課程博士46名、論文博士7名の計53名、同9

月25日付け授与の課程博士104名、論文博士5名の計109名、合計222名です。また、リーディング大学院プログラムを1名の受講生が修了しました。

山極総長から、代表者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞をもって終了しました。各分野別内訳は次のとおりです。



博士学位授与式の様子

学位	平成 29 年 5 月			平成 29 年 7 月			平成 29 年 9 月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	0	0	0	3	1	4	2	0	2
博士(教育学)	1	0	1	1	0	1	5	0	5
博士(法学)	0	0	0	0	1	1	1	2	3
博士(経済学)	1	0	1	1	1	2	5	0	5
博士(理学)	12	1	13	4	0	4	6	0	6
博士(医学)	11	5	16	17	2	19	13	2	15
博士(医科学)	1	0	1	1	0	1	0	0	0
博士(社会健康医学)	0	0	0	4	1	5	0	0	0
博士(人間健康科学)	3	0	3	0	0	0	0	0	0
博士(薬学)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
博士(薬科学)	0	0	0	0	0	0	1	0	1
博士(工学)	12	0	12	7	1	8	40	1	41
博士(農学)	4	1	5	3	0	3	5	0	5
博士(人間・環境学)	0	0	0	3	0	3	6	0	6
博士(エネルギー科学)	0	0	0	0	0	0	6	0	6
博士(地域研究)	1	0	1	0	0	0	3	0	3
博士(情報学)	1	0	1	0	0	0	8	0	8
博士(生命科学)	3	1	4	2	0	2	1	0	1
博士(地球環境学)	2	0	2	0	0	0	2	0	2
計	52	8	60	46	7	53	104	5	109

(教育推進・学生支援部(教務企画課))

[目次に戻る](#)

大学の
動き

全学教育シンポジウム「社会とつながる京都大学の教育」を開催

9月8日（金）、桂キャンパス「船井哲良記念講堂」を会場とし、教職員等約250名の参加を得て、「社会とつながる京都大学の教育」をテーマとする全学教育シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、参加者が教育について全学的な議論や意見を交わすことにより共通理解を深め、今後の教育の改善・充実に資するとともに、部局の枠を越えた教職員の交流の場となることを目指して、平成8年から開催しており、今回で21回目となります。

午前の部は、北野正雄 理事・副学長による「京都大学が直面する課題と教育改革の方向性」と題した基調講演の後、「京都大学の教育の今とこれから：人文・社会科学系からの提言」をテーマにパネルディスカッションが行われ、人文・社会科学系部局の研究科長をパネリストとして各部局における取組について議論が交わされました。

午後の部は山極壽一 総長の基調講演「社会の中で京都大学の存在感を高めるために」に続き、高大連携・地域連携をテーマに、ELCAS、オープン教材、教育問題解決支援およびサービス・ラーニングの各取組について報告がありました。さらに、パネルディスカッションとして「京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくか」をテーマに、山極総長や理事も参加して活発な議論が行われ、会場からも盛んに質問が寄せられました。

今回のシンポジウムが、現在の取組の発展や新たな取組の企画など、教育現場における様々な形の実践に繋がることを期待します。



北野理事・副学長の基調講演の様子



山極総長の基調講演の様子



パネルディスカッションでの川添理事・副学長の様子



パネルディスカッションでの飯吉理事補の様子



パネルディスカッションの様子

（教育推進・学生支援部（教務企画課））

[目次に戻る](#)

大学の
動き

日本学術会議近畿地区会議 学術講演会を開催

9月30日(土)に、日本学術会議近畿地区会議と京都大学は、地域社会の学術の振興に寄与することを目的として、日本学術会議近畿地区会議 学術講演会「超スマート社会に向けて—AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)により私たちの生活はどう変わるか—」を国際科学イノベーション棟において開催しました。

梶 茂樹 日本学術会議近畿地区会議代表幹事(本学名誉教授)および大西 隆 日本学術会議会長の挨拶の後、吉田 進 本学特任教授(名誉教授)より「AIやIoTがますます身近な存在となる“超スマート社会”と呼ばれるこれからのネットワーク社会を俯瞰し、近い将来これらの技術が私たちの社会にどのような影響を及ぼし、私たちの生活はどのように変わっていくのか、専門家と一緒に解き明かしていきたい」との本講演会の趣旨説明が行われました。



左から、挨拶する大西会長、梶代表幹事、趣旨説明する吉田特任教授、総合司会の東野教授



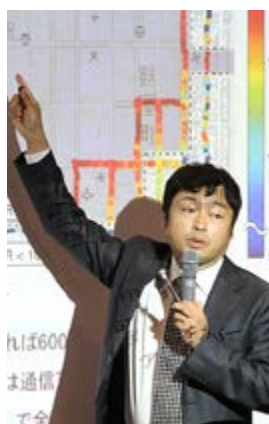
講演会場の様子

続いて、原田博司 情報学研究科教授および西田豊明 同教授が、それぞれ「超スマート社会を実現するビッグデータ創出技術」、「人工知能のもたらしつつあるもの」と題して講演を行い、続いて木津雅文 トヨタ自動車株式会社コネクティッドカンパニー ITS企画部部長が「自動運転の技術開発とその課題」、井上智洋 駒澤大学経済学部准教授が「AIは雇用を奪うか」と題して講演を行い、IoTを支えるネットワークやAI等に関する技術的観点や応用例、雇用をめぐる経済的な観点など多様な視点から、具体例を織り交ぜながら技術開発の最先端や大学における研究成果を披露しました。

大学の
動き

講演後は、兵藤友博 立命館大学経営学部教授をコーディネータとして、講演者全員による全体討論が行われました。そこでは参加者からの質問に答える時間を設け、参加者からの鋭い視点による疑問と、対するパネリストからの興味深く丁寧な解説の応酬に、会場は熱気に包まれ大いに盛り上がりました。その後、東野輝夫 大阪大学大学院情報科学研究科教授が閉会の挨拶を行い、盛況のうちに終了しました。

本講演会には学内外から約200名の参加があり、終了後のアンケートでは「民間企業の技術者や他大学の若手経済学者の話聞く機会は少ないので面白かった」との本学学生からの感想や「日頃、話題になっているテーマでこれからの課題を知ることができた」、「各分野で実際に取組をされている方の話を直接聞ける機会は大変有意義だった」などの感想が寄せられました。



講演する原田教授



講演する西田教授



講演する木津部長



講演する井上准教授



全体討論の様子（コーディネータの兵藤教授および講演者）

（研究推進部（研究推進課））

[目次に戻る](#)



医薬系総合研究棟「イノベーションハブ京都」開所記念式典を開催

医学研究科は、本年度竣工の「医薬系総合研究棟」に設置された産官学公連携拠点「イノベーションハブ京都」の発足を記念して、9月13日（水）に開所記念式典および記念講演会・祝賀会を開催しました。

医薬系総合研究棟藤多記念ホールで開催した記念式典では、湊 長博 理事・副学長による挨拶、門川大作 京都市長による祝辞が述べられた後にテープカットが行われました。また、式典終了後は施設見学会を実施しました。

その後会場を芝蘭会館へ移し、稲盛ホールで記念講演会を開催しました。上本伸二 医学研究科長、中山和久 薬学研究科長による挨拶の後、永井雅規 文部科学省研究振興局ライフ



記念式典で挨拶をする
湊理事・副学長



記念式典で挨拶をする
門川京都市長



テープカットの様子



「イノベーションハブ京都」が開設された医薬系総合研究棟



イノベーションハブ京都施設内の様子



記念講演会で挨拶をする
上本医学研究科長



記念講演会で挨拶をする
中山薬学研究科長



記念講演会で祝辞を述べ
る永井課長（文部科学省）



記念講演会で講演をする
菱山理事（AMED）

部局の
動き

サイエンス課長より祝辞が述べられました。引き続き、菱山 豊 国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）理事ら10名による、医療イノベーションをテーマとした講演会が行われました。

その後山内ホールで、阿曾沼慎二 理事・産官学連携本部長による挨拶と乾杯の発声とともに祝賀会が開催されました。

今回の式典にはイノベーションハブ京都の入居企業関係者のほか、公的機関、産業界、金融業界より総勢200名を超える出席があり、新たな拠点の発足を祝いました。

「イノベーションハブ京都」は、医薬系総合研究棟のうち主に3、4階部分にあり、アカデミア研究者、ベンチャー企業や大企業、投資家等、異分野のスペシャリストが集い、ネットワーク構築と情報交換を通じて、バイオメディカル分野のベンチャー育成とシーズの事業化を目指します。



祝賀会で挨拶をする阿曾沼理事・産官学連携本部長

(大学院医学研究科)

[目次に戻る](#)

瀬戸内海研究会議 京都大学大学院地球環境学堂主催「平成29年度 瀬戸内海研究フォーラム in 京都 ～川と海のつながりが育む豊かな文化と生態系～」を開催

地球環境学堂は、瀬戸内海研究会議と共同で「平成29年度 瀬戸内海研究フォーラム in 京都 ～川と海のつながりが育む豊かな文化と生態系～」を百周年時計台記念館にて開催しました。

本フォーラムは、瀬戸内海環境保全知事・市長会議、本学の生態学研究センターおよびフィールド科学教育研究センター、総合地球環境学研究所との共催で行ったもので、瀬戸内海環境保全協会、本学森里海連環学ユニットの協賛、環境省、京都府、京都市、琵琶湖・淀川水質保全機構の後援のもと、関係者を含め179名が参加し、盛大に行われました。

9月6日(水)の第1セッションでは、「都市を支える景観：瀬戸内海国立公園から学ぶ」をテーマに、社会学的な見地から、さまざまな地方(じかた)の暮らしについて、京都、徳島、丹波を事例に、それぞれのスケール、それぞれの資源(人、モノ、景観、暮らし)を生かした活動、現況について紹介され、観光への取り組みや住民の認識、地域の民話の活用と再生、国定公園指定を受けての今後の取り組みなど、他の地域との比較や外国人観光客の誘致も含めた今後の方策や、暮らしの在り方について活発な意見交換が行われました。

また、ポスター発表セッションでは、「環境保全・創造に関する研究・活動報告」をテーマに、26題の発表がありました。発表された内容は、瀬戸内海・琵琶湖流域における水質構造や栄養塩動態、マイクロプラスチック、難分解性有機物の研究にはじまり、地域活性化のための小規模な取り組みの紹介や、植物プランクトン種組成と分布、ドローンを用いた特定種の

部局の
動き

生息域に関する研究、下水処理における分解特性の研究など、化学、社会学、生物学、工学と多岐にわたる発表が行われ、活発な研究討議が各パネルで実施されました。また、同日には、懇親会も開催され、多様な研究者や行政関係者が集う中、有意義な情報交換の場となりました。

9月7日（木）には、第2セッション「生物生産からみた流域と沿岸域の相互関係」および第3セッション「豊かな生態系の琵琶湖との共生を探る」において、理化学的な研究を中心とした講演と活発な議論が行われました。

「生物生産からみた流域と沿岸域の相互関係」のセッションでは、瀬戸内海を中心に、若狭湾など他の事例も踏まえて、海底湧水の流入がもたらす水産物への効果や、森林から沿岸域への窒素供給、土地利用と溶存鉄の供給の関係、水産物におけるプランクトンなどの一次生産者の重要性や、栄養段階の違いから生じる、水産物の栄養の転送効率に関する活発な議論がなされました。

「豊かな生態系の琵琶湖との共生を探る」のセッションでは、琵琶湖が抱える諸課題の変遷と現況について紹介した後、琵琶湖における一次生産者とは異なる、微生物を介した食物連鎖（細菌から原生生物）の発見と重要性について、最新の知見を提供するとともに、水草の有効利用に向けた新たなバイオガス利用の取り組みと里湖再生について発表され、瀬戸内海にも共通する課題や、研究や諸政策のアプローチの違いなど、多面的な議論が展開されました。

最後に、本フォーラムの総括、ポスター発表賞の授賞式、次年度のフォーラムの紹介なども行われ、2日間に渡るフォーラムの全日程が終了しました。

本フォーラムは、琵琶湖や流域圏も踏まえた地域間の比較と、社会学など多分野の学問の視点を交えて瀬戸内海を見つめ直し、考えるフォーラムとして、活発な議論や意見交換がなされ、大変有意義であったと多くの参加者からの声が聞かれました。今後も、瀬戸内海やその流域における多分野の研究の進展と、地域の発展につながる舞台として本フォーラムが機能していくことが期待されます。



集合写真

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る](#)



林 芳正 文部科学大臣が防災研究所附属火山活動研究センター（桜島火山観測所）を視察

8月20日（日）、林 芳正 文部科学大臣が、防災研究所附属火山活動研究センター（桜島火山観測所）を視察されました。

同センターは、わが国で最も活動的な火山である桜島を全国的なレベルでの野外観測拠点として、学際的な実験・観測を総合的に推進しています。

同センターにおいて、森田正信 理事、中川 一 防災研究所長、大志万直人 同研究所教授（同センター副センター長）および竹内 英 文部科学省研究開発局地震・防災研究課長の出迎えを受けた後、大志万教授から、同センターが進める火



火山活動研究センターの概要説明を聞く林大臣

山噴火機構の研究とその成果を応用した火山噴火予測および火山浅部マグマ供給系とその構造に関する研究について概要説明を受けられました。

その後、高免^{こうめん}観測坑道（平成28年完成）を視察されました。林大臣は、現場で山本圭吾 防災研究所助教による水管傾斜計および伸縮計の解説に興味深く聞き入り、熱心に質問されていました。

最後に、黒神地区にまわり、昭和火口から天を衝いて巻き上がる大噴煙を観察されました。当日は、夏の厳しい陽射しが降り注ぎ、路面に堆積した火山灰が車両の通行とともに視界を覆う条件下でしたが、大臣は約1時間の視察を精力的にこなされ帰路につかれました。



高免観測坑道にて水管傾斜計および伸縮計の解説を受ける林大臣



昭和火口の大噴煙を観察される林大臣

（宇治地区事務部）

[目次に戻る ↗](#)



平成 29 年度京都大学森林科学公開講座「感じる樹木」を開催

生存圏研究所と農学研究科森林科学専攻との共催により、平成 29 年度京都大学森林科学公開講座を 10 月 14 日（土）に開催しました。今年の公開講座は「感じる樹木」というテーマのもと、当日は小雨がぱらつく天候にも関わらず 42 名の参加者が集い、杉山淳司 生存圏研究所教授による挨拶・司会進行の後、午前は 3 つの講演会を行い、午後からはシロアリ、ナノセルロース、大吉山の自然散策という 3 コースに分かれての見学実習が行われました。

午前最初の講演である伊勢武史 フィールド科学教育研究センター准教授（森林育成学分野）からは「人はなぜ、森で感動するんだろう？」と題し、人の生存と美的感覚における進化生物学的考察、人の心は森によってどう動かされ、そしてそれがどう進化に関係してきたかなどを熱心に説明されました。

2 番目の講演である矢野浩之 生存圏研究所教授（生物機能材料分野）からは「木の音と楽器の響き」と題し、天然由来の繊維材料ナノセルロースファイバー研究のきっかけにもなった木製楽器の音の研究について、オルゴールのバックミュージックのもと、大変わかりやすい説明をされました。

午前最後の講演である西村裕志 生存圏研究所助教（バイオマス変換分野）からは「溶かして知る・活かす、木の化学」と題し、漫画も活用したわかりやすい説明で、近年発見されたリグニン分解能力がある海の細菌をはじめとして、身近にある木を溶かす微生物の力、そして木を溶かして木材の中の化学成分を分析する手法や新しい形で木を生かす方法について、説明をされました。

昼食休憩後、午後からは「シロアリの感じる木材（居住圏環境共生分野 柳川 綾 生存圏研究所助教）」、「ナノセルロースに触れよう（生物機能材料分野 阿部 賢太郎 生存圏研究所准



熱心に講演を聴いている参加者



実習風景



教授)」および「大吉山の自然と現地のものがたり（バイオマス形態情報分野 杉山淳司 教授）」の3コースに分かれて実習や見学が行われましたが、参加者からは来年度以降への期待感も多く寄せられ、大変満足したとの声を聞くことができました。

感じる樹木。人間は樹木によってどう心が動かされるのか。様々なテーマの講演会や実習を通して参加者各々が色々な思いをはせる、貴重な一日となりました。

（宇治地区事務部）

[目次に戻る ↗](#)

寸言

自立

吉村 章太郎



私は福岡県久留米市の出身で、70年代初めに経済学を学びました。私の学生時代は、70年安保を挟んで全国的に大学紛争が吹き荒れた時期にあたります。京大でもそうでした。大学がロックアウトされて授業が長期間休校になったり、大勢の学生同士が主義主張を巡って殴りあったりで、今からだと一寸想像しにくい時代だったと思います。今でも、当時の学友に会うと自然とその話になります。

そうした時代に学生としてどう過ごしたのかですが、むろん人様々であり一概には言えないのですが、あまり授業が無かった割には結構勉強に時間を費やしていました。遊んでばかりいたのではないかとよく言われますが、それはそうではありませんでした。これは学友を見ても、私自身についてもそう言えます。むしろ大学受験のときよりも勉強したと言えるかも知れません。寛容と自由を自ずと感じさせる風土が京大にあり、若者らしい意識過剰もあって、一人ひとりに自己の考え方や行動が問われている時代だと思えたからでしょう。自分自身が寄って立つ何か確かなものを掴みたいとの思いが勉強に向かわせたような気がします。むろん確たるものなど何も掴めなかったのですが。

優秀な先輩からは親しく助言をしてもらいましたし、同期の学友の明晰さに目を見張ることも多く、己の未熟さを痛感する日々でした。地方から出てきてそういう場所に身を置けたことが、今思うと一番価値があったかも知れません。

ゼミは経済政策を専攻し大野英二先生の元で学びました。文化的造詣の深い貴公子的風貌の先生でした。今はもう学ぶ人も少なくなったかも知れませんが、マルクス経済学をベースとした経済政策の歴史分析です。多くの方がそうだと思いますが、私にとってもやはりゼミで過ごしたあの濃密な時間が学生時代の思い出のかなりの部分を占めます。マルクス経済学の本は繰り返し読んで随分と感激した記憶がありますが、その後社会人となって、その知識が会社の仕事に直接役に立ったことはありません。でも学んだことが全く無駄であったとは思っていません。理解をしようと必死に格闘しましたし、学ぶことで自分なりの方法論的なものは土台が出来たと思うからです。後から振り返ると社会人になるための準備を整えていたような気がする時期でした。

社会人になり、その後会社を中心に過ごした長い年月についてはここで記すことは出来ませんが、私自身は、その後幸運にも会社経営に携わる機会を得ることが出来今日に到っています。会社経営のためには、現状を分析する力、それに基づき将来を推測する力、リスクを嗅ぎ分ける力、冷静な判断が出来る力、決断が出来る力が必要です。私自身それらが十分に備わっているとは思いませんが、またそれらは社会人になって経験を積むことで涵養されるものだとは思いますが、学生時代に土台が作られるような気がします。学生時代に何かに向き合い、真剣に格闘してみませんか。むろん自分なりにです。京大で学ぶということは、それが出来る場にいることだと思います。

(よしむら しょうたろう、太陽日酸株式会社取締役会長 昭和47年経済学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随 想

企業に触れて思うこと

名誉教授 小森 悟



専門を生かしたコンサルタント業や丹波の実家での農業への挑戦等の定年退職後の計画は未だ実現できていないが、非常勤職を渡り歩きながら老害を及ぼさない程度に研究教育に携わる毎日を楽しんでいる。一つは、同志社大学に嘱託講師・研究員としてお世話になり講義と研究活動の場を与えてもらいながら、同大の懐の深さ、親切的な教職員、驕りの無い優秀な大学院生等に目を引かれている。また、海洋研究開発機構では招聘上席研究員として若い研究者の皆さんと環境流体に関する研究等でリフレッシュさせようとともに煩雑な研究活動評価や研究費・人員削減等の研究所が抱える問題も感じ取っている。このような教育研究活動の他にも、現役時代には基礎研究重視で産学連携には消極的であったが、定年後は企業の社外取締役や技術顧問として企業経営や技術開発等にも携わっている。特に、企業経営や組織改変の在り方、先端技術よりも基盤技術による技術開発の重要性等を自分の目で見る事ができるのはこれまでとは違う別世界ゆえに非常に新鮮に感じるとともに、つい大学と比べてしまう。

企業の主目標は利潤追求と明確であるが、この目標の達成状況が悪い場合には、不採算事業の廃止や組織のスクラップ＆ビルド等を経営陣が迅速に行い軌道修正がなされる。翻って、企業の利潤追求に相当する大学の主目標はと考えると、研究大学に限れば金銭的利潤追求ではなく、研究力の向上と研究を通した有能な人材育成にあると思われる。しかしながら、昨今の報道等によれば日本の大学の研究力の低下が指摘され、その主原因として大学への供給資金の減少が挙げられている。確かに運営費交付金の減少は深刻な問題であるが競争的資金の積極的な獲得により総研究費が増えている大学でも研究力の低下が懸念されている。これは、企業に例えれば、受注は多いが（大学の場合：大きなプロジェクトで資金を稼ぐが）、収益が増えない（研究力が上がらない）、つまり、儲けに繋がらない非効率な仕事（国際的論文の発表に結びつかない活動）をやっていることになる。本来なら過去数年程度の研究成果だけを評価して運営交付金や競争的資金が配分されればいいものを、官僚・有識者好みの組織・制度改革等を条件とした即戦型の大型プロジェクトが次々と立ち上がるため、面子をかけた資金獲得競争に中堅の優秀な研究者が多大な時間的犠牲を払うことになる。その資金の獲得後も組織弄りや、年度毎の資金の分配消費、上辺の繕いのための催し物開催や成果報告作成等の無駄な仕事に時間を奪われ堅実な論文作成のための研究どころではなくなる。

研究費の問題以外にも常勤教員の定員削減も進行する中で、増大する産学連携、地域貢献、高大連携、教育・入試改革等の仕事にも対処せねばならず、研究よりもそれらの仕事に生甲斐を感じる土日完全休暇型の教員が過度に増殖するようであれば、大学の目標も益々薄れるのではと懸念される。企業の場合、「損して得取れ」の戦略もあるが、大学の場合、無駄な仕事で一度低下した研究力を取り戻すのは容易ではない。中期目標等は研究業績の向上に重点を置いた簡単なものにし、研究資金配分は研究業績の評価で行い、大学自らも研究能力不足の教員や不要な組織・制度の整理等を促進すれば、研究力向上のための毒のない真の大学改革に繋がりに思うのだが。。。

（こもり さとる，平成 28 年退職 元大学院工学研究科教授 専門は流体工学）

[目次に戻る ↗](#)

洛 書

斜面崩壊雑感

千木良 雅弘



最近、狂ったような強い雨、大量の雨が良く降るように感じる。専門家に聞くと、本当にそうかどうか分からないという返事も返ってくるが、私と同じ印象を持つ人は多いと思う。実際、毎年のように豪雨があり、その結果斜面崩壊による災害が発生してきている。そして、時々地震による斜面崩壊災害が起こってきた。私は1997年に京都大学防災研究所に赴任して以降、大学院理学研究科の学生を相手に「災害地質学」の授業をしており、最初にここ20年くらいの主に日本の災害のリストを示すのであるが、1996年から今までで、このリストに項目のなかった年は4年だけである。

斜面崩壊などの土砂災害に対して、危険区域の指定や警戒情報の発信がきめ細くなされるようになったが、一方でこれらには、抜けや大きな仮定があることは意外に忘れられがちである。例えば、土地利用をも制限する土砂災害防止法が2000年に制定されたが、これは地すべり、土石流、急傾斜地の崩壊を対象としており、2016年の熊本地震の時に阿蘇カルデラで多数発生した流動的な地すべりや、2011年の台風12号によって多数発生した深層崩壊は対象として含まれていない。それらの発生場所の予測は可能になりつつあるが、いまだ途上である。土砂災害警戒情報は、降雨による土砂災害に対する情報であり、高度に精緻化した方法に基づいてほぼリアルタイムに発信されるが、そのもとになる地盤のモデルはブラックボックスであり、1種類である。一方で、地質の博物館と言われるわが国の地盤の中は多様であり、そう簡単ではない。このことから、警戒情報は、おおまかな指標であり、それに従えば絶対安全ということはないことがわかる。

上記のような行政から発信される情報に対して、住民が足元の成り立ちを知ることは、情報を受ける場合の心構えを大きく左右すると思う。我々の経験は、風化花崗岩のように強い雨に弱い地域とそうでない地域があることを教えている。また、2014年の広島豪雨災害時に被害の大きかった地域は、土石流によって形成された沖積錐の上にあり、そこでは土石流が繰り返されてきたことが地形に記録されていた地域であった。ただ、これらに対する住民の理解は十分とは言えなかった。

斜面の崩壊現象を理解するためには野外研究が不可欠である。しかしながら、特定地域を丹念に調べてそれを取りまとめるようなスタイルの研究では、著名な学術雑誌に掲載されるような論文の数を稼ぐことはなかなかむずかしい。結局、研究者の評価にあたって、1点集中突破主義的な研究に軍配があがる。しかし、野外から切り取ったものだけ切り刻んでみても、それを再び野外に戻して、野外の空間的また時間的スケールの中で考え直すことができないければ、その研究結果の価値は半減あるいは無意味なものになる。まして、そうした成果が災害軽減につながることは多くない。

(ちぎら まさひろ、防災研究所教授 専門は応用地質学)

[目次に戻る ↗](#)

話題

平成 29 年度総長杯ディスクドッチ大会を開催

9月7日（木）、8日（金）の2日間にわたり、総合体育館メインフロアにおいて、平成29年度総長杯ディスクドッチ大会が行われました。ソフトボールに代わる種目として昨年度初めて実施され、2回目の開催となる今年度は20チームのエントリーがあり大盛況でした。各試合とも攻守せめぎ合う白熱した展開となり、大きな声援が送られていました。

決勝戦では、桂地区（工学研究科）事務部の「AクラBクラ」（代表者：和田晋輔）チームが、医学研究科「前回優勝チーム」（代表者：河村知子）を下し、見事に優勝しました。試合終了後の表彰式では、宇野圭助 総務部人事課福利厚生室長より優勝、準優勝チームに賞品が授与されました。



優勝した「AクラBクラ」チーム



準優勝した「前回優勝チーム」

最終順位は、以下の通りです。

優 勝 AクラBクラ（桂地区（工学研究科）事務部）

準優勝 前回優勝チーム（医学研究科・医学・病院構内共通事務部）

第3位 財財財務（財務部）

第4位 belmondo（医学部附属病院）

（総務部（人事課））

[目次に戻る ↗](#)

本学学生が第29回ユニバーシアード競技大会(2017/台北)で金メダルを獲得

8月26日（土）、台北で行われた、第29回ユニバーシアード競技大会、陸上競技男子20キロ競歩において、本学体育会陸上競技部所属の山西利和さん（工学部4回生）が2位に50秒差をつける1時間27分30秒の好記録で見事優勝されました。レースは序盤から山西さんを含む日本代表選手3人で先頭集団を形成。10キロ付近で山西さんが一人飛び出すと、後続をぐん



競技の様子

話題

ぐん引き離し、そのままゴールしました。

山西さんからのコメント：

「優勝することができて、大変嬉しく思います。これをひとつのステップとして、次に繋げていきたいと思います」



表彰式

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る ↗](#)

高等教育研究開発推進センター 大学生研究フォーラム 2017 を開催

8月18日(金)、百周年時計台記念館において、高等教育研究開発推進センターおよび電通育英会、東京大学大学総合教育研究センターとの共催により、「大学生研究フォーラム 2017」を開催しました。

今年で最終回を迎える本フォーラムは、過去10年間のフォーラムを振り返り、次の10年の課題を見定めることを目的として開催されました。当日のプログラムは、村上正行 京都外国語大学教授の趣旨説明、溝上慎一 高等教育研究開発推進センター教授による講演に続き、飯吉透 同センター長、森 隆一 電通育英会理事長より主催者挨拶がありました。

午後の3つの分科会(「企業との連携」、「学びとキャリアの連携」、「地域との連携」)においては、松高 政 京都産業大学准教授、岩佐峰之 京都市立西京高校教頭、石山恒貴 法政大学大学院教授、今村久美 認定NPO法人カタリバ代表理事、片峰 茂 長崎大学学長、中村怜詞 島根県立隠岐島前高校教諭から、各テーマに沿った報告がありました。

最後のパネルディスカッションでは、中原 淳 東京大学准教授、松下佳代 高等教育研究開発推進セ



講演の様子



昼食交流会の様子

話題

ンター教授，児美川孝一郎 法政大学教授により，今後の課題について活発な議論が行われました。

本フォーラムには，大学関係者，企業人事関係者，大学生・大学院生，高校教員等，学内外から計334名の参加者があり，盛会のうちに終了しました。



パネルディスカッションの様子

（高等教育研究開発推進センター）

[目次に戻る](#)

訃報

このたび、沢田敏男 元総長・名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介します。

沢田 敏男 元総長・名誉教授

沢田敏男先生は、平成29年10月18日に逝去されました。享年98歳。

先生は、昭和17年に京都帝国大学農学部農林工学科を卒業され、岡山農業専門学校講師、同教授を経て、昭和25年に京都大学農学部助教授に就任、同34年に同教授となり、農業工学科農業施設工学講座を担当されました。その後、昭和46年農学部長、同53年学生部長の要職を経て、昭和54年から同60年までの2期6年間にわたって第20代京都大学総長を務められたのち、京都大学名誉教授の称号を受けられました。



先生は、永年にわたり農業工学、特に農業土木学の研究、教育に精励され、多くの研究業績をあげられたほか、農業土木学会会長としても活躍され、研究者、技術者を多数育成し、学術の進展、農業の発展、生産性の向上に大きく寄与されました。先生の研究は、「水利施設の基礎工に関する研究」と「貯水ダムに関する研究」に大別され、いずれも、ダムをはじめとする水利諸施設の設計上の基本的な問題に取り組み、新たな知見を得るとともに、その成果を実証したことにおいて高い評価を受けられました。その評価の一端として、昭和58年農業土木学会学術賞、同59年日本農学賞および読売農学賞、同62年日本学士院賞を受けられました。

京都大学総長に在任中は、大学内の諸問題の解決に尽力され、国際学術交流、キャンパス問題、大学院制度の改革、学生寮問題に意を注がれました。特に、大学の国際化の重要性に着目し、諸外国の学術機関との国際交流に積極的に取り組み、ドイツ連邦共和国ベルリン自由大学をはじめとする多くの大学と学術交流協定を締結し、大学間の国際学術交流を推進するとともに国際性豊かな人材を育成されました。

京都大学退職後は、日本学術振興会会長、大学設置・学校法人審議会会長、日本学士院会員、国際高等研究所所長等、多くの要職を歴任されました。また、教育研究や大学行政等における顕著な業績が評価され、平成3年勲一等瑞宝章、同6年文化功労者、同17年文化勲章を受けられました。

以上のように、先生は、永年にわたりその専門学識によって学問分野において多くの功績を残すとともに、卓越した識見と温厚なる人格により、教育研究、大学の管理運営、国際交流の推進、学術の振興等に多大な貢献をなされました。

[目次に戻る](#)